高齢者の豊かな生活のために　　２０２５年２月１日発行

手 賀 沼 通 信（第３２３号）

Ｅメール：nittay@jcom.home.ne.jp　http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/　新田良昭
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai　http://tegatu2.web.fc2.com

今月は弟の旅行記です。
弟は私より１歳下の８６歳、今まで勤務した場所や訪れたことのある土地などを人生最後の旅行として楽しんでいるようです。

特別寄稿

軽井沢への旅　新田自然

第１日目　（１０月１８日）　信濃追分宿から軽井沢

思い立って軽井沢方面を旅してきた。
旅の目的は、「中山道信濃追分宿」を訪ね、立原道造や堀辰雄がこよなく愛したこの地の雰囲気を味わいたい、併せて上皇后美智子さまのお歌に詠みこまれた「別去れ（わかされ）」の地を訪ねお歌を偲びたい。さらには賑わう軽井沢の街並や、紅葉に染まった「白駒の池」と苔の森、奥蓼科にある東山魁夷の絵の舞台になった「御射鹿池」なども訪れたい、という欲張ったものであった。
そもそもこの旅の発想は、「軽井沢高原文庫」という施設で「立原道造展」が開かれているという情報があって、それを目当てに組んだものであった。日程変更もあって、残念なことに「道造展」は一週間前に終わっていて、彼が兄事した堀辰雄文学記念館に寄ることにしたのだ。そこに行けば立原道造の「なにか」があるはずだ。
それと堀辰雄の「風立ちぬ」は、若き日にあの出だしの数行に憧れたこともある。

「風立ちぬ　いざ生きめやも」

このフレーズは不思議な音感を持って記憶の中に生きている。
私は幼いころ、母の実家に預けられて育った。その家の叔父が戦争に征き、叔父の書架にこの本が残されていたのだ。当時「風立ちぬ」は戦地に赴く若者の必読書ともいわれていたようだ。幼かった私は決して開くことはなかったが、その背表紙の色まで心に残っていた。
さて、当日の天気予報は曇り、翌日は曇りのち雨の予報であったが、朝７時、とにかく車をスタートさせた。圏央道・関越道・上信越道を経由して、信濃追分宿に着いたのは昼前だった、宿の入り口にある駐車場は空いていた。旧街道の宿場町、かつては追分の宿として繁盛したという宿場街も、人通りは疎らで、いわゆる「軽井沢」の雰囲気はなかった。紹介されていた蕎麦屋に立ち寄ったが、ここだけは混んでいて、人だかりがしていた。
待っている間に、向かい側にある旧旅館「油屋」に行った。ここは宿の本陣のあったところで、当地を訪れる文学者の宿でもあった、昭和１２年秋、立原道造はその日宿泊していて火災に遭い、二階に逃れたが、炎に追い詰められ、格子の中から助けを求め、火消しが格子を破り九死に一生を得た。しかし火災の２年後、悲しいことに道造は２４歳で病死する。建物は修復され宿泊も可能だそうである。そこには「立原道造展」のポスターが貼られたまゝになっていた。「立原道造の詩を歌う」というイベントまでがあったそうで、逃したチャンスが空色のポスターになって風に揺れていた。

「夏の旅　村はずれの歌
　咲いているのは　みやこぐさ　と
　指に摘んで　光にすかして教へてくれた―
　右は越後へ行く北の道
　左は木曾へ行く中仙道
　私たちはきれいな雨あがりの夕方に　ぼんやり空を眺めて佇んでゐた
　さうして　夕やけを背にしてまっすぐと行けば　私のみすぼらしい故里の町
　馬頭観世音の叢に　私たちは生まれてはじめて言葉をなくして立ってゐた」

堀辰雄文学記念館は程近くにあって、見学者は我々のみであった。道造は、彼のみずみずしい感

性と言葉の構築で、「ソネット」という１４行詩を完成させた。夭折した詩人はあふれる天分を詩以外にも、短歌・物語・翻訳・書簡・パステル画・建築設計書など、膨大な作品を残した。道造の自筆書簡など数点が展示されていたのに満足した。

記念館を出て１０分ばかりで中山道の分岐「別去れ」に至る。別去れとは当地の方言で追分を意味するそうで、そこには石の道標や常夜灯、道祖神、石仏、歌碑などがあり、道造の詩にあるように、中山道はここで北国街道を右に分岐する。道標にこんな歌が彫り込んである。

「さらしなは右　みよしのは左にて　月と花とを追分の宿」

右の道を辿ると北国街道を経て月の名所の更科、左の道を行くと中仙道から東海道を経て、桜の名所吉野山、ここは月と桜の里の別れ道だと、これまた趣のある案内板である。

ここまで来ると、訪れているのは我々と、もう一組の夫婦だけで、ゆっくりと「別去れ」の気分を味わうことができた。

もう一つ、この地で浸りたかったのは、上皇后美智子さまの詠まれた

「かの時に我がとらざりし別去のかたへの道はいづこ行きけむ」

というお歌だ。皇太子妃となるにあたって、大変な選択を迫られ、この道を行くことにした当時の思いを述懐されたもので、もう一方の道を辿ればどうなっていただろうかと…、それは、よい選択をしたのだとの確信のもとに詠まれたものだと思った。「別去れ」というこの地方の方言を見事に詠み込まれた、素晴らしいお歌だ。人生における選択という、誰もが経験する真理が胸を打つ

そういえば宿の入口の公園に、上皇様の詠まれたお歌が大きな石に刻まれていた。

「長き年の　後に来たりし山の上に　はくさんふうろ再び見たり」

美智子さまとはこの軽井沢で出会い結婚に至ったが、久しぶりにこの地を訪れ、散策した浅間の麓に、以前も二人で見たハクサンフウロが咲いていた、よくここまで来ることができたね、という実感を込められたお歌だと思った。その平易な言葉遣いに陛下の人徳が偲ばれた。

軽井沢の街に戻ったところで雨が来た。追分宿の閑散に比べると、観光客であふれている、クルマを停め人ごみの中に紛れ込んだ。ふと感じたのだが、この観光の街が、例えば江の島の通りとちがうのは、生活臭のする街という点だ、軒並み土産物屋ということでなく、事務所、薬屋、不動産屋、雑貨屋があったりするのである、ここに住んでいる人たちの街でもある、それは面白い発見だと思った。

気がつけば雨は止んでいて、今夜のホテルへと向かった。薄暗くなった道をぐるぐる回って、やっとの思いで見つけたホテルは深い森の中、「軽井沢芸術倶楽部」は、およそ人の気配のない不思議な静寂をもって我々を迎えた。

そして、信じられないことに、駐車場には車が１台もないのだ。当然だが誰にも会わず、本当にここが今夜のホテルか？　といぶかった。

「ほんとうに我々だけらしいよ」

受付から戻ってきた息子が不思議そうに言う。確かに変だ、予約段階では、軽井沢のホテルは満杯で、予約できたのは此処しかなかったのだ。構内は木々に被われ、ところどころに奇怪なモニュメントらしきものが現れる、ホテルへの道にはドングリが散らばって、歩くと音がする。建物は二階建て、ゆったりとした入り口だ。ところがフロントに受付の卓が１つだけ、通常のホテルにあるカウンターはなく、受付も黒い背広を着た白髪の男性一人だけなのだ。

仕切りの向こうに大きな部屋があった、正面に大きな薪ストーブ、反対側にグランドピアノが置かれ、ソファーが３０席くらい、ホテルのラウンジとしては不似合いに広い。

案内された部屋は広く、この部屋には似つかわしくない程に小さなテレビがあり、そのことにかなり強烈な違和感を覚えた。「私今夜はお風呂に入りません」と、洗面室をチェックしていた妻が言う、洗面室はトイレ兼用で、ガラスの折戸の向こうに造りつけの濃いブルーの浴槽があって、通常は跨いで入る一定の高さがあるのだが、ここの浴

槽は折戸を開けると、いきなり深いのである。「落ちそうで怖い」という。彼女がこのホテルを気に入っていないのが明らかであった。

夕食は一階にあるレストランで、広々とした室内に客は我々３人だけ、テーブルは１０卓くらい、３人だけの食堂はがらんとしていて、これも普通ではない。しかしちゃんとコックが調理してメイドが運んでくる。

窓の外は深い森の闇、洩れる光に大きな黒い木が浮かんで見える。バックグラウンドミュージックもなく、宮沢賢治の童話「注文の多い料理店」に出てくるような…、そんな雰囲気の中で、我々だけのディナーが始まったのである。愛想の良い若い女性がワインとビールを運んできた…。

驚いた、軽井沢の地ビールは実に美味で、赤ワインも穏やかで、そして今夜のフレンチ、それがまた想定外であった。

「信州サーモンとモンサンミッシェルムール貝、クミン風味のニンジン　紫キャベツのブレゼ　キャビア添え」、

この長々しい名前のオードブルに参った。妻の不満が一気に消えて、恐る恐るフォークを持った妻が「美味しい」と一言、周囲のことを気にせず、食べることに集中し始めた。カボチャポタージュスープやパンもいい、ながながしい名前のメインディッシュも美味しくいただいた。

終わりよければすべてよし、妻が「美味しかった」と言うと、「ありがとうございます」と、女性がほほ笑んだ。

軽井沢への旅
第２日目（１０月１９日）

明るくなるのを待って、習慣になっている朝のウオークに出た、改めて外からホテルを眺めてみたら、昨夜とはだいぶイメージが違って見えた。二階建てのクリーム色の建物が左右に広がっている。広い敷地はカラマツやツガなどの高木に被われ、一部紅葉したものもある。奇怪なモニュメントと思ったのは石造のアート作品であった。周囲はいわゆる軽井沢の別荘地という雰囲気ではなく、普通の道には人通りもない。しかしさすがに大気はいつもの湘南ではなく、ひんやりとしている、晴れていて、空気が清々しい。浅間山がすぐ近くに見える、白い雲が褐色の山肌を這うように下っている、一部に噴煙らしきものも見える。そう、浅間山は活火山であった。立原道造のソネットにこのような一節があった。

「ささやかな地異は　そのかたみに
　灰を降らした　この村に　ひとしきり
　灰は悲しい追憶のやうに　音立てて
　樹木の梢に　家々の屋根に　降りしきった」
（はじめてのものに）

爆発は小さな揺れを伴って、この辺りに灰を降らせたのであろう。灰の降る音とは？…、

散歩の道は、ゆるやかな曲線の下り坂になって「しなの鉄道」中軽井沢駅方面に向かっている。もとＪＲ信越本線の線路は複線で、この辺りでは中山道に沿っている。広い道を避けて歩いて小一時間ばかり、やっと散歩の人や駅に急ぐ人が見え始めた。通りをいくつか曲がったが、浅間山を目印にして迷わずに戻った。

昨日の愛想の良い支配人(らしき人)が出てきたので聴いてみた。「どうして我々だけなのですか？」「たまたまなんですよ、今夜は満室です」「へえ　そんなこともあるんだ」、そんな話をしながら、このホテルのホテルらしくないところに話が行った。

「お気づきのように、ここは一般のホテルとして建てられたものではありません」

「あのグランドピアノにお気づきになりましたか？　あれは美智子さまが１０年ばかり愛用されたベーゼンドルファーです」。

驚いた、美智子さまと陛下が１０年にもわたってご利用されていたとは。話を接ぎ合わせると、この建物は一時代を築いた複写機メーカーの某有名社長が１９９２年に研修宿泊の場として築いたもので、「軽井沢倶楽部」と命名したが、訪れる人の顔ぶれから迎賓館とも称されたと。社長夫人と美智子さまのご親交もあって、夏の軽井沢のプライベートな宿泊所に利用されたものと思われる。

お泊りになった部屋を見せていただいたが、ゆったりとしているが、わりと質素で、「こんなお部屋で？」という感じがした。いまは日本芸術協会の運営で、コンサートやコンクールの予定のないとき、ホテルとして活用いるようだ。

「軽井沢芸術倶楽部」の表情がだいぶ見えてきた。

陛下は美智子さまとこの倶楽部にお泊りになり、周辺の野山を散策し、ハクサンフウロの花をみつけられ、あのお歌を詠まれたのかと思うと、倶楽部に対するイメージが変わってきた。そんなことでイメージが変わるとは、現金なものである。

早めに倶楽部を出て「万平ホテル」に向かった。ジョン・レノンが泊まったホテルに行きたいという妻の要望により、立ち寄ることにしたのだ。ホテルの周囲は樹々に被われた古い別荘地で、細い道の突き当りにあった。ここはまさに軽井沢、すでに観光客がぞろぞろと歩いている。ホテルは木造の欧風建築で、白壁と黒い柱が周囲の雰囲気に溶け込んでいる。木造のホテルは壁に歴史を物語るステンドグラスがはめられ、重厚な雰囲気、床も木の古いフローリングで、足音もソフトに全体に調和している。喫茶室に席を確保し、コーヒーを注文した。やや苦めのコーヒーであった。

軽井沢から「白駒の池」に向かう北八ツ横断道路は、カーブが多くきつい登り坂で、高度を上げるにしたがい紅葉の度合いが増してくる。

木の階段を上ると、歩きやすい木道が続き苔の森に入る、コメツガやシラビソの鬱蒼とした原生林はびっしりと苔に被われ、陽も届かないオールグリンの世界だ。ルーペ持参の人が苔を観察している、近づいてみると苔の花が小さく花をつけている。緑の中を行く人々の服の色が混ざり合って調和している。１５分ばかりで白駒の池に着く、高地にあって日本最大の天然湖だそうで、水は透明で水草も、池の底までも見えそうな気がする。池の畔にはカエデ、ダケカンバ、ナナカマドなどが赤く黄色く色づいている。観光客と登山客が入り混じって紅葉を眺めているが、２１００メートルの池の畔で景色を楽しむには寒過ぎる。ヒュッテがあり温かいものも出るようだが、混雑しているので先を急ぐことにした。

次の目的は「御射鹿池（みしゃかいけ）」だ。東山魁夷画伯が描いた「緑響く」のモチーフとなった池である。キャンバスの中央にラインを引き、上部には緑の森を、下半分はそれを映した池の水面、そこに一頭の白馬が佇んでいる、静謐な時が止まっている、そんな絵を長野県立美術館で見たことがあった。このシーンに浸ってみること、それは旅の主要な目的の一つでもあった。

奥蓼科への間道は難路で、対向車との離合で苦労したが、左に小さな池が見えてきた。「御射鹿池だ」、瞬間、そう感じた。それはまさに既視感であった。

日差しはないが風もなく、静かな池に、カラマツは褐色に黄葉して高く、水際には赤いカエデが点々と、此処に白い馬が現れれば、季節こそ違えまさに「緑響く」の世界である。ここにも観光客は多いのだが、池と対峙すると全く気にならない、音さえも消えるような…。

東山さんは「モーツアルト・ピアノ協奏曲第23番、第２楽章」をイメージして描いたそうであるが、水面に映る木立の中に白馬が現れ、右から左にゆっくりと歩いて去るシーンが見えるようで、まさにこの緩徐楽章のイメージに沿っている。

画伯は「白馬はピアノの旋律で、うしろの森はオーケストラ」と書かれたそうだが、ピアノの高音程の部分はまさに白い馬、ゆっくりとした歩みはアダージョのテンポ、「緑響く」という題名はこれだと感じた。

信州、それにしても、この「白い馬」が描かれたのはたまたまではないような気がする、この地方と馬の関係性が強く窺えるのだ。先ほど見てきたのも「白駒の池」だった。他に地名だけでも「白馬岳」「白馬村」「木曽駒岳」「馬籠宿」さらに「木曽馬」もある。

後で調べたのであるが、木曽馬は日本唯一の在来種で、古くよりこの地方で大切にされてきたようだ。それは農耕用、運搬用、あるいは軍馬として利用されてきた。田植えでは雪形さえも馬に見立てる、馬がいかに身近にあって愛され、大切にされていたかがわかるような気がした。最後には生命さえも頂戴するけれど、それは馬と共に生きるこの地方の文化であると思った。

旅の終わりはあっけなかった。中央道は順調で、快速に飛ばして夕刻までに戻ってくることができた。「終活だ」なんだと言って息子を急き立てて組んだ旅も終わった。

「いい旅だった、今度こそ最後だ」と言ったら、息子が、にやっと笑って

「次は博多ですね」「大丈夫、お供しますよ」だと。